

全史料協鳥取大会参加記

江 島 香

今回の大会は「文書館制度の拡充をめざして」をテーマに鳥取市で開催された。今回も相変わらずの大盛況で、会場は参加者の熱気であふれていた。これはひとえに鳥取県と事務局のご苦労によるものであり感謝に堪えない。にもかかわらず私は大会中に感じた違和感を払拭できなかった。その理由について思い当たることがあったので、些かそぐわないかも知れないがここで述べさせていただき、参加記に代えたい。

大会のテーマは前述の通りで「史料・人・地域をむすぶネットワーク」をサブテーマとし、

斎藤氏（新潟県立文書館）と小暮氏（群馬県立文書館）がテーマに沿った報告を行われ、加えて鳥取県の現状について濱崎氏（鳥取県立図書館）が説明された。各々の報告の趣旨自体は理解できたが、率直に云って議論はあまり発展的なものではなかった。これは報告が個々の事例紹介に終始してしまったことによるのではないだろうか。勿論各々の施設は設置主体も趣旨も異なり様々な事情を抱えており、館務の展開上、個々の事例は参考になる。しかし個別の事情を認識した上で、採るべき方向を模索することが、

地域や組織のなかで自己実現をなし得ていくための重要な方策となるのに対し、議論では一定の方向を見だし得なかった様に感じた。

現在の全史料協の目標は文書館制度の拡充にあり、文書館設立の根底にあるべき思想については既に議論済みであるのかもしれない。しかし全国的には、文書館そのものについての認識が深まっているとはいえないのが実情ではないだろうか。併せて「文献史料」が指し示す内容についても、中世・近世文書と近代文書、私文書と公文書との弁別の議論も十分に尽くされているとは言えない。施設の機能について考えてみても、文献史料のみを対象とする文書館ではなく、それとともに保存されてきたモノについても併せて保存をはかっていく複合施設の設置も一部では提唱されているように、史料保存のあり方についても議論が分かれる所なのである。こうした性格の議論は「参加記」という場に必ずしも相応しいものではないように思われるので話を今回の大会に戻すが、分科会での議論で指摘があった様に、利用者の視点や、行政的視

点からの発言はあったものの、史料が持つ情報を損なわずに保存するという史料からの視点が忘れ去られていたのではないだろうか。歴史資料を保存するにはどういう視点が必要なのか、そしてそれを行政という限られた場所においてどうすれば最大限発揮できるのかを議論していくことこそが必要だと思われるが、今回の大会ではそうした議論は不充分だったように思えた。

「連携」という言葉を掲げるのであれば、それは単に類似施設の連携だけではなく、歴史資料がもつ多様性に目を向け、隣接諸科学との連携という意味も含めた史料保存のあり方を模索するのも一つの方向ではないだろうか。それこそが「連携」という意味における史料からの視点であろう。全史料協に参加している組織は公文書館に限らず多様である。そのような場で、大会を通じて史料保存についての議論を深化させていくには、保存の思想とも謂うべきものについて認識をつくっていく場を設定することもあるいは必要となってくるのではないだろうか。

(柳川古文書館学芸員)